

動物のフィールドサイン

脊椎動物担当 上舞 哲也

野生動物を観察しようと山や森にでかけても、その姿を目にすることはなかなかできません。これは、ほとんどの野生動物が夜行性であることも原因の一つと考えられますが、人間を警戒し、接触を持たないように生活していること理由としてあげられます。

しかし、野生動物そのものを観察できなくても、彼らが「生活していた痕跡」(＝フィールドサイン)は、簡単に見つけることはできず、その痕跡から彼らの生活ぶりを想像することができます。

今回は、フィールドサインについて私が実際に遭遇したものをもとに紹介したいと思います。

フィールドサインの種類

地面に残る足跡やフン、葉や木の実をかじるときにできる食痕などは比較的容易に観察できるフィールドサインです。また、注意深く観察すると、草むらを頻繁に行き来することでできる「ケモノ道」、森の中で小休止をする場である「ねぐら」、繁殖・子育てをする場である「巣」などのフィールドサインもみることができます。さらに、森歩きをすると、イノシシやシカが泥浴びをする場所である「ヌタ場」、木の幹に残った角研ぎ跡や爪痕などのフィールドサインにも遭遇することができます。

高千穂河原の足跡とフン

高千穂河原の砂地で写真のような足跡とフンを見つけました。足跡をみると蹄(ひづめ)のある動物のようです。

蹄はもともと5本指だった動物が走り追求していくうちにできたもので、第1指は退化、第3指、第4指の爪が足の先端につく主蹄に、第2指、第5指の爪が主蹄の後ろにつく副蹄になったといわれています。



砂地で見つけた痕跡

高千穂河原で蹄を持つものは、キュウシュウジカかイノシシですが、最後の決め手は俵状をしているフン。よく見るとパラパラと周囲に落ちています。これはシカのフンです。足跡とフンから、このフィールドサインの持ち主はスギの植林地に住むキュウシュウジカと判明しました。



シカの蹄



俵状のシカふん

道路横の畑で見つけた特徴的なフィールドサイン

耕したばかりの畑には小動物のフィールドサインが多く残ります。

まず、見つけたのが、右の写真にある「モグラ塚」です。モグラがトンネル掘削作業で出た不要な土を、下から押し上げるように捨てたためにできるもので、立派なフィールドサインです。トンネルの断面直径で持ち主を推測でき、30 mmよりも大きい場合はモグラ(鹿児島ではコウベモグラ)、小さい場合はヒミズです。調べると50 mm近くあったので、モグラ(コウベモグラ)のものだと推測できました。



モグラ塚

次に見つけたのが、右の写真にあるやや直線的な歩行パターンを持つ足跡です。足跡の形からニホンアナグマであることがわかりました。通常、アナグマは前足跡の上に後足を重ねる「ハンター歩き」をしますが、写真の足跡は前足と後足の足跡が重なっていません。調べてみると、ゆっくり歩くと足跡は重な



アナグマの足跡?

らないそうです。人家から離れた場所にあり、リラックスしながら歩いていたのかもしれませんが。